



<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawai/>

きれいを維持する

副校長 池田 千穂

分散登校期間が開けて、子ども達みんなと後期を迎えることができました。保護者の皆様には、ご家庭での学習に多大なご協力をいただきまして心より感謝申し上げます。端末の持ち帰りに際し、ご家庭でのネット接続や使用の約束などの環境も皆様のご協力で整えることができました。現在は家に持ち帰っていませんが、今後状況が変わっても対応できるように、子ども達には、スキルとモラルを両面から引き続き指導してまいります。

さて、皆さんが小学生の時も、当たり前のように「そうじの時間」があったと思います。しかし、欧米では子どもが学校を掃除する国はほとんどないそうです。日本の学校ではこの「そうじの時間」を教育活動の一環として大事なものと捉えています。「自分で使った場所をそうじする」のは当たり前でしょうし、「みんなが使う場所を綺麗に使う」のも当然という精神がこの時間を通して培われています。そのせいでしょうか、サッカーW杯の観戦後、ゴミを拾う日本人の姿が世界から賞賛されたこともありました。



しかし、今、ご家庭で箒や雑巾を使うことは珍しいと思いますし、自動掃除機も活躍しています。学校で「そうじの時間」は必要なのかという声も聞かれます。それでも学校で「そうじの時間」を大切に考えるのは、ただ場所をきれいにしたり、掃除の方法を習得したりするだけが目的ではなく、モラル面の意義が大きいからです。

私は以前、子ども達にディズニーランドの「カストーディアル」の話をしました。ディズニーランドではそこで働く人のことをキャストと呼びますが、その中でも「カストーディアル」はとても重要なキャストと考えられています。「なんのキャストだと思う？」と子ども達に聞くと「パレードに出演する人。」という答えが返ってきました。「お掃除をする人だよ。」と言うと少し驚いていました。「夢の国が汚いと夢の国にならないから。」と考える子もいました。

ウォルト・ディズニーはディズニーランドの開園当初、来園客が捨てていくゴミで園内が汚れるのをなんとかしたいと考えていました。カラフルなゴミ箱をたくさん設置するなどいろいろと工夫を試みたそうです。そんな時、あることに気がつきます。「いつもきれいでゴミのない場所はいつもきれいな状態が保たれている。ゴミが落ちていたり汚れていたりすると、そこはゴミを捨てたり汚したりしても良いと思われるのだ。」そこで、常に従業員が園内を歩き回り、ゴミが一つでも落ちていたらすぐ拾う、汚れていたらすぐに拭くというのを根気強く行なったそうです。すると時間はかかりましたが、来園客達の意識も徐々に変わり、ゴミの量は減っていったそうです。「カストーディアル」は掃除という意味ではなく、「維持する」という意味です。きれいな状態を維持する。汚いから掃除をするのではなく汚くしないために掃除をする。そんなウォルト・ディズニーの考え方がもとにあるのだと思います。昼間にパフォーマンスを見せてくれるカストーディアルは今はいないようですが、ナイトカストーディアルは閉園から朝まで翌日の開園に備えて掃除をしています。トイレ掃除は「赤ちゃんがハイハイしても安心」というくらいの自信を持っているそうです。



本校では、10月末より新型コロナウイルスの感染者数減少に伴い、子ども達の清掃活動を再開いたしました。まだ、感染防止に予断を許さない状況ですので、市のガイドラインに従ったうえで段階的に実施していきます。これまで通り、地域の就労施設 Wings の方々にも学校をきれいにするお手伝いを続けていただきます。「ゴミが落ちていたら自分のじゃなくても拾うように。」とはなかなか言えないご時世です。後片付けをしっかりと行い、自分の出したゴミは自分で捨てる、特別教室の机や椅子は使った後は次の人が気持ちよく使える様にする。誰かがやってくれるのではなく、一人一人が普段からそういった小さなことを意識していくことで、学校のきれいな環境は維持されます。「汚したくないからきれいにする。」その気持ちが人々を感動させ、共感を呼びます。状況が刻々と

変化していく現在ですが、こうしたモラルが変わらず維持されるよう、子ども達にはていねいに指導していきます。子ども達がきれいな環境を大切に作る大人に育つよう、今後ともご協力の程、よろしくお願いたします。